

ここでは、子どものしつけや教育に関する13の項目について、母親が役割分担をどう考えているのかたずねた。各項目について「親が家庭で教育する」「親と先生が両方で教育する」「園や学校の先生が教育する」「塾や専門家にまかせる」「あえて教育しなくてよい」の五つから選択してもらった。

はっきり分かれた「親が家庭で教育する」と「親と先生が両方で教育する」

55ページの図2-12①～⑥は、学年別に「親が家庭で教育する」と答えた部分を濃いグレーで、「親と先生が両方で教育する」をうすいグレーで表したものである。図の全体の半分以上が濃いグレーになった項目と同様にうすいグレーになった項目がはっきりと分かれたので、前者をパターンA、後者をパターンBと分類した。

パターンA、つまり多くの母親がこの項目は「親が家庭で教育する」と答えたものには、「朝起き・夜寝る時間など規則正しい生活リズム」「偏食せず、ぎょうぎよく食べられるようにする」「自分の身のまわりのことを自立してできる」「あいさつやお礼の言葉などがきちんとと言える」といったものがある。基本的な生活習慣やマナーについては「家庭で」と考える母親が多い。

一方、パターンBの「親と先生が両方で教育する」と答えた母親が多い項目は「学習への意欲や興味・やる気など」「個々の子どもがもつ能力を引き出すこと」「友だちなど人とのつきあい方」「弱い人たちに対する思いやりや社会的な道徳心」となっていて、学習面のことや社会性を育てるのは「親と先生が両方で」と考える母親が多いことがわかる。以上のように、多くの母親の意識の中では、「これは家庭で」「これは親と先生で」という、

かなりはっきりした線引きが行われているようである。

なお、「親が家庭で」と「親と先生が両方で」と答えている割合が拮抗しているのは、「習い事の練習や宿題などの学習習慣」（「親が」43.2%、「親と先生が」47.6%、いずれも全体値。以下同様）、「約束したことを守る」（「親が」48.6%、「親と先生が」51.0%）の2項目だった。

また、「将来の受験に向かっての学力」は「親と先生が」51.8%、「あえて教育しなくてよい」19.3%、「園や学校の先生が教育する」11.0%、「塾や専門家にまかせる」9.1%、「親が」8.8%という結果だった。「あえて教育しなくてよい」が13項目中最も多いのは、この項目だった。

さらに、「スポーツ能力や体力向上」「音楽や美術など芸術面の才能を伸ばす環境」という項目でも似たような数値の分布がみられた（詳しくは111～112ページの基礎集計表を参照）。

学年が上がるにつれ、増える「基本的な生活習慣は家で」

本調査では、年少児～小2生まで、5学年の子をもつ母親を分析の対象にしている。子どもの学年や園に通っているのか、小学校に通っているのかで、母親の意識はかなり変わっていた。

たとえば「偏食せず、ぎょうぎよく食べられるようにする」のは「親が家庭で」と考えている人は年少児64.3%、年中児72.2%、小1生84.5%と、学年が上がるにつれ、増えていた。同様に「自分の身のまわりのことを自立してできる」は年少児56.3%、年中児62.6%、小1生72.9%となっている。また、「あいさつやお礼の言葉がきちんとできる」は年長児で59.1%だが、小1生では68.0%に増えている。

●図2-12 家庭と園や学校のしつけ×学年 ※スペースの都合で表記できなかった数値についてはP.111の基礎集計表を参照





子どもが年少児の頃はまだ十分できないことも多く、「先生と家庭で協力してやっていきたい」という雰囲気がある。しかし子どもが成長したり、園の生活に適応して周囲の子どもたちができるようになるにつれ、「こういうことは家庭でしっかり教育しなければ」という意識が母親の中で強くなることがわかった。

また、年長児と小1生の母親の意識に大きな差がみられるのは、園と学校に期待するものが大きく違っているからである。小学校に入学すると「学校は勉強をするところなのだから、基本的な生活習慣やマナーは家庭でしつけなければ」という意識が強くなり、このような結果が出たのであろう。

▶「親と先生が両方で」が学年が上がるにつれ増えていくのは学習に関連する項目

「習い事の練習や宿題などの学習習慣」は「親と先生が」が年長児で44.5%だったのに対し、小1生では51.0%に増加している。同様に「スポーツや体力向上」は61.6%から67.5%へ、「将来の受験に向かっての学力」は48.9%から56.4%へ、「学習への意欲や興味・やる気など」は81.0%から88.9%へといずれも5%以上高くなっており、これらの項目では小学校への入学を機に「親と先生が両方で」という意識が母親の中で強くなっていった。小学校入学とともに学習面をもっと先生にみてもらいたい、という母親の期待を映し出しているといえよう。

▶母親の就業状況によって差が出た項目

次に、母親の就業状況によって園・学校とのしつけや教育の役割分担に対する意識が変わってくるのかどうかを分析した。全般的にはそれほど大きな差はなかったが、図2-13の「偏食せず、ぎょうぎよく食べられるようにする」という項目では「親が家庭で」と考える人が専業主婦80.9%、パートタイマー74.7%、常勤者62.0%と差が出た。専業主婦とパートタイマーの差は6.2%、専業主婦と常勤者の間には18.9%の開きがある。

こうした差の出る背景には、子どもを幼稚園と保育園のどちらに行かせているのが大きな要因になっていた。本調査では常勤者の51.0%、パートタイマーの19.2%、専業主婦の2.7%が保育園に子どもを預けている。

図2-14は同じ項目を保育園を利用して母親と幼稚園を利用して母親に分けてグラフにしたものである。この項目では、保育園利用者のほうが、幼稚園利用者よりも20~30%「親が教育する」という数値が低い。

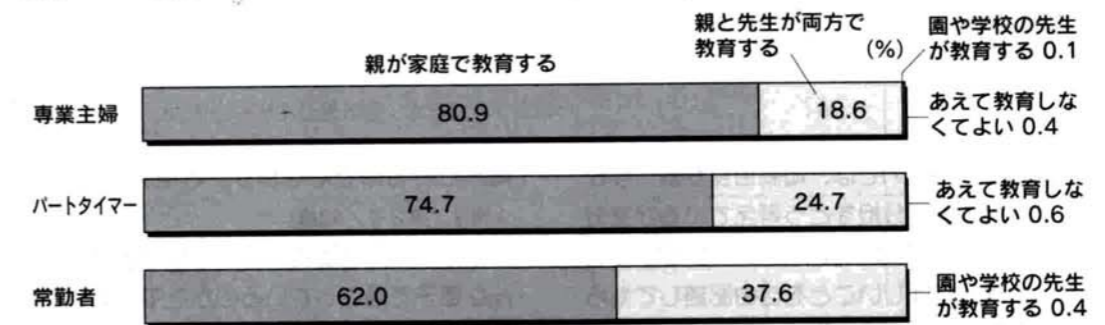
保育園では、食べることや寝ること（昼寝）も含めて、子どもの生活全般をみてもらうことが前提となっているので、ごく自然な流れで食事にまつわるしつけも「親と先生が両方で」という結果が出てくるのであろう。常勤者が「親が家庭で教育する」という意識がうすいのではなく、幼稚園と保育園の保育内容の違いが影響してこのような結果をもたらしていると思われる。

▶「親と先生が両方で教育する」の中身

本調査では、母親がどのようなことを「親が家庭で教育する」ことだと考えているのかを明らかにするために、このような質問項目を設定した。結果的に、基本的な生活習慣やマナーについては「親が家庭で」と考えていることがわかったが、「親と先生が両方で教育する」と考えている項目も多いことがわかった。その中身については「園・学校まかせでなくわが家流に教育したい」というものから、「先生のアドバイスを頼りにしたい」というものまで、幅があると思われる。今後はこうした点についてさらに調査したい。

また、日々、子どもたちと接している先生たちはどう考えているのだろうか。機会を作って同じ質問項目で園や学校の先生へのアンケートを実施してみたい。そこから親と先生がお互いに期待していることの違いや一致点が見つかるはずである。

●図2-13 偏食せず、ぎょうぎよく食べられるようにする×母親の就業状況



●図2-14 偏食せず、ぎょうぎよく食べられるようにする×子が通う園・学校

